

高倉健と中国

1980年代の中国における日本映画とその男性イメージの受容

劉文兵 大阪大学准教授

東京大学大学院総合研究科博士課程修了、博士（学術）学位取得。日本映画ペンクラブ賞奨励賞受賞。現在大阪大学人文学研究科准教授。代表作：『日本の映画作家と中国』（弦書房、2021）、『映画がつなぐ中国と日本：日中映画人インタビュー』（東方書店、2018）、『日中映画交流史』（東京大学出版会、2016）、『中国映画の熱狂的黄金期』（岩波書店、2012）、『映画のなかの上海』（慶応義塾大学出版会、2004）。

40数年前、高倉健ブームが中国を席卷した。1978年10月より、『君よ、憤怒の河を渉れ』（1976年）を皮切りに、『幸福の黄色いハンカチ』（1977年）、『遥かなる山の呼び声』（1980年）、『海峡』（1982年）などの高倉健主演作が次々と中国で公開され、大ヒットとなった。この時から高倉健は、中国人であればその名前を知らない者はいないほどの絶大な人気を博し、カリスマ的存在となった。高倉健の影響は、映画の世界にとどまらず、ある世代の中国人の美意識や価値観を根本から揺るがした。本講演はこのような日中間のシンボルと化した「高倉健」のイメージがどのように形成され、中国社会にどのような影響を与えてきたのかを紐解く。

6月26日(木) 13:10-14:40

予約不要
言語：日本語

志高館 SK203教室

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

tel. 075-251-3930 e-mail: ji-

gs@mail.doshisha.ac.jp